

[[敬愛SDGsプロジェクト]プロジェクト・ノート]

# 1年次後期基礎演習および 2年次専門研究におけるSDGsの取り組み

敬愛大学国際学部教授

庄司 真理子

## 1 はじめに

総合地域研究所の共同研究として持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）を取り上げて3年目となる。今年度は、「敬愛SDGsプロジェクト——千葉で学生の自律性を育てる教育方法の全学共同研究」と題して、教育方法に重点を置くこととした。

本学国際学部国際学科は、国際社会を研究するファカルティは存在するが、大学教育において教育方法に特化した研究者は存在しない。しかし大学も教育機関であるからには、この点を無視して教育することはできない。また、SDGsのゴール4は持続可能な開発教育（Education for Sustainable Development: ESD）を目標としている。国際学部は、その名を冠するとおり、国際的で幅広い教養、多様な価値観を学ぶ学部であるからには、学生に対してファカルティとして大学教育の方法についても検討する必要がある。ことに2020年はコロナ禍によって、全世界の大学が教育方法の大きな変革を要請された。オンライン授業の方法の研究、ICT（情報技術通信）による教育方法の開拓など、専門分野を超えて大学教員が教育方法を再検討した。

ここでは、1年次後期基礎演習（2020年度）および2年次専門研究（2020年度）の実践をもとに、実際の授業においてSDGs教育がどのような展開を示したかを報告する。

なお、1年次、2年次、双方に共通する目標として、「国際社会にとってSDGsは必要か？」という問いを立て、この問いに対して、学生が個々人の関心のあるテーマを見つけ、これについてレポートを執筆してもらうことを目標とした。そのためにレポートの執筆方法などのアカデミック・スキル、プレゼンテーションなどのコミュニケーション・スキルさらには、自己評価のためのルーブリック評価を学んだ。

## 2 1年次後期基礎演習の概要

### 2.1 ねらい

大学での基本的な学び方を修得することが第1のねらいである。具体的には、豊かなコミュニケーション能力や、国際的で幅広い教養、多様な価値観を認め合い協働する力などの基礎を養うことを目指す（DP3・CP3）。到達目標は、論理的思考を身につけ、主体的に行動できる能力を身につけることである。

## 2.2 授業の進め方

講義形式、およびディスカッション、プレゼンテーションなどを用いた授業形式をとり、論理的な考え方、解決策を見つける思考、進路選択について学ぶ。試験やレポート、課題設定は担当教員が検討し、実施する。また、フィードバック方法も担当教員が検討し、実施する。アカデミック・スキルズを指導する中で、ブレーンストーミング、プレゼンテーション、振り返りシートを活用する。

## 2.3 評価

本授業の評価基準は以下のとおりである。

表1 1年生の評価基準

秀 (S)	授業のねらいを超えて自ら探求し、課題の解決において論理性、検証性がある口頭発表および文章表現ができる。
優 (A)	授業のねらいが達成できており、論理性、検証性がある口頭発表および文章表現ができる。
良 (B)	授業のねらいが達成でき、論理性、検証性がある口頭発表または文章表現ができる。
可 (C)	授業のねらいがほぼ達成でき、論理性、検証性とはどういうことかが説明できる。
不可 (D)	授業のねらいに達していない。

## 2.4 学習内容

表2 1年次後期のシラバス学習内容

1	スタートアップ	授業の進め方について知る。各自の学習目標と計画を立てる
2	授業の進行方法	レポーターのやり方、配分、『レポート・論文の書き方』
3	SDGsを学ぶ	SDGsについての説明、事例の紹介
4	アカデミック・スキル1	問いを立てる。国際社会で起こっていることを5つ挙げる
5	プレゼン・スキル	良いプレゼンテーションとはどのようなものか
6	アカデミック・スキル2	ループリック評価を学ぶ。プレゼンのループリックによる相互評価
7	アカデミック・スキル3	自己の課題の設定：今、社会で起こっていることをひとつ
8	レポートの書き方1	各自の選んだレポートのテーマ、参考文献、章立ての予定などを発表してもらう
9	レポートの書き方2	レポートの書き方のマナー、効果的な方法などを学ぶ
10	アカデミック・スキル4	SDGs17の目標から自己のテーマに関わる3つの目標を選ぶ
11	レポートの書き方3	注の書き方について確認する
12	レポートのテーマ確定	章立ての方法を学ぶ
13	レポートの参考文献1	参考文献の見つけ方
14	レポートの参考文献2	適切な参考文献を選んでいるか、確認する
15	レポート概要報告	各自にレポートで書く予定の内容の概要を報告してもらう

## 3 1年次後期基礎演習の詳細

### 3.1 SDGsの学び

2年次専門研究（2020年度前期）のSDGsプロジェクトは、あまり芳しくない結果に終わった。2年生に対するレポートの課題の出し方が間違っていたことを反省した。レポートの課題は以下のとおりである。

「国際社会にとってSDGsは必要か？ という問いに対して、自己が興味を持つ国際社会の問題をひとつ取り上げ、これについて論じなさい。」

2年前期に、SDGsについて数回にわたって説明を行い、問いに対するレポートの書き方も指導したが、上記の問いを見た学生たちの反応は、「自己が興味を持つ国際社会の問題をひとつ取り上げ」という後段のミクロな問いではなく、「国際社会にとってSDGs」は何か

というマクロな問題であった。SDGs については、複数回にわたって説明し、理解を促したつもりであったが、それであっても彼らにとって目新しい問いは「SDGs とは何か」であった。そのため 9 割の学生が「自己が興味を持つ国際社会の問題をひとつ」取り上げるのではなく、17 の SDGs の目標を並べて説明するという結果に終わった。

この失敗を踏まえ、1 年次後期基礎演習では、同じ問いを投げかけながら、その問いを分解して、半期の間にひとつひとつ問いを明らかにしてもらうという手法に切り替えた。

第一段階として、広く国際社会の問題に関心を向けることを促し、多様な問題を思い浮かべてもらった。その中で、「今、社会で起こっていることを 5 つ」を書き出してもらうという作業を行った。これは、15 回の授業のうちの早い段階、4 回目で行い、全員にレポートを提出させた。

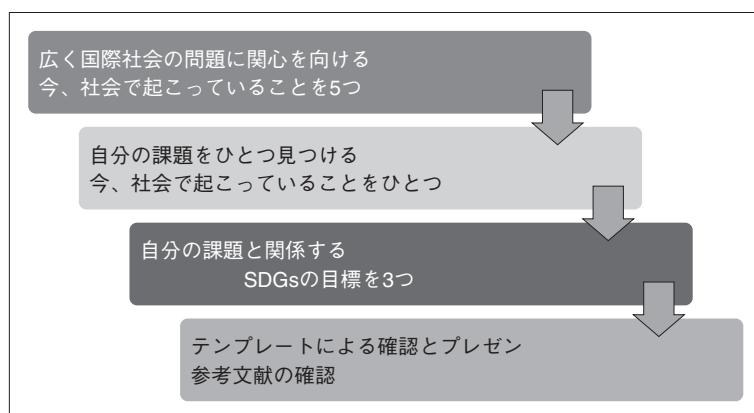


図 1 SDGsの問いの立て方

第二段階として、「自己の課題の設定：今、社会で起こっていることをひとつ」という形で、5つの問題の中から、期末レポートにする自己の課題を一つ選ぶ作業を行ってもらった。第一段階は、4 回目の授業で行ったが、直後に第二段階に入ると、2 年次前期と同じ問題が発生する可能性があったため時期をずらして 7 回目の授業でこの作業を行ってもらった。前期の問題は、学生が「国際社会にとって SDGs は必要か？」との問いと、「自己が興味を持つ国際社会の問題をひとつ」との問いとの間に判別がつけられず、レポートの課題を、自己が興味を持つ「自分事（じぶんごと）」として捉える視点が欠けていたことが問題であった。それゆえ、あえて時期をずらすことによって、自己の興味を引き出すことを狙った。

第三段階として、「SDGs 17 の目標から自己のテーマに関わる 3 つの目標を選ぶ」作業を第 10 回目の授業で指示した。これも第二段階の直後ではなく、時間をおいて行ってもらった。やはり前述後段のミクロな問いではなく、「国際社会にとって SDGs」は何かというマクロな問いに戻ってしまう可能性があったため、時間をおいて、「自己のテーマ」の確認とともに 3 つの目標を選ばせる作業を行った。このことによって、「自己のテーマ」を再確認する作業をしてもらった。

第四段階として、ここに参考文献を加えた形で、これまでの経緯をひとまとめにしたプレゼンを行ってもらった。プレゼンにあたっては、下記にあるようなプレゼン・テンプレートを学生に渡して、ここにそれまで自分が選んできた問いおよびテーマと SDGs の 3 つ

## 国際社会にとってSDGsは必要か？

副題 — あなたが選んだテーマ —

学籍番号：

名前：



なぜそのテーマを選んだか？  
そこで何が問題か？ 課題か？

リサーチ・クエスチョン  
Research Question を書く

- ・調べたいこと：@@@@@
- ・あるいは
- ・疑問に思うこと：@@@@@



## 選んだ3つの目標

- ・目標
- ・目標
- ・目標



テーマと関連する3つのSDGsの目標：  
なぜその3つを選んだか。

- ・目標@は、@@@@@の理由で選んだ。
- ・目標@は、@@@@@の理由で選んだ。
- ・目標@は、@@@@@の理由で選んだ。



## 結論

- ・これも期末レポート提出時に答えられれば大丈夫です。



## 参考文献

- ・@@@@@
- ・@@@@@



スライド 期末レポート・プレゼン用テンプレート

の目標を一連のものとして関連づけて考え、その考察を深めるための参考文献を選ばせた。参考文献の選定にあたっては、なるべくインターネットのみに頼らず、できれば新書版程度の書籍を選ぶように指示した。コロナ禍において書店からの本の購入が難しい場合も考慮して、CiNii ArticlesやGoogle Scholarなどのサイトから学術論文を少なくとも1本PDFでダウンロードすることも教えた。アカデミックな研究論文は初学者には難解ではあるが、無料で高度な内容の文献が手に入る。新書版1冊よりも論文1本のほうが短いため、その意味では早く読めること。SNS上の場合によっては不確かなエッセイなどより、内容的に信頼性の高い文章であることから、学生たちのレポートの質を高めるためにもPDFによる学術論文の読破を勧めた。完成したテンプレートで各自、プレゼンを行ってもらい、プレゼン能力を磨く練習もしてもらった。

### 3.2 ルーブリック評価

学生たちは「ルーブリック」<sup>1)</sup>という概念そのものについて、初めて名前を聞くというのが大多数であった。異なるテーマでプレゼンやレポートを書いているながら、なぜ教員はこれを統一的に評価できるのか疑問を抱いている。学生のこのような疑問に答えるべく、ルーブリック評価を覚えてもらうこととした。

ルーブリックという概念自体、学生たちにとってはなじみのないものである。ルーブリックを理解してもらうために、「習うより慣れろ」ということで、まずは教員がプレゼンのルーブリック評価表を学生たちに配布し、学生相互にプレゼンを評価するということを実践してもらった。並行して教員も学生のプレゼンを同じルーブリック表を利用して評価した。

今年度、Zoomでの授業となったため、配布したプレゼン・ルーブリックでは適合しない点、また、実際に利用してみるとルーブリックに不適切な評価項目がある点が散見された。

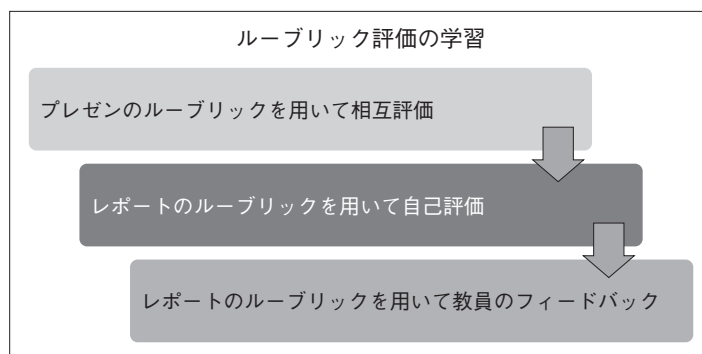


図2 ルーブリック学習のプロセス

筆者が昨年まで使っていたプレゼン・ルーブリックの例として、「相手と目を合わせながら堂々と発表している」などは、Zoomでは評価できない。ルーブリック表をシンプルでわかりやすいものとする。評価項目に対して、過剰に対応しているプレゼン、過小すぎて評価項目を無視しているプレゼンも見受けられるため、プレゼン・ルーブリックの在り方そのものを再検討する必要があるだろう。

次にレポートのルーブリックを利用して、学生自身にレポート提出前にルーブリックによる自己評価を実施してもらった。1年生の場合、16名中8名のみが自己評価を提出した。ルーブリック表を、海外旅行に行くときの持ち物チェックリストのような形式として、自分のレポートがルーブリック評価に見合っているかをチェックさせた。8名中6名はクラスの上位の成績を占め、未提出者で上位に入った学生は1名のみであった。ルーブリックによる自己評価が、ある一定の効果を示したことが理解できる。

最後に教員がルーブリックを用いてフィードバックを行った。受け取った学生は、自己評価に対して、教員がむしろクレームをつけた形になり、学生のやる気を削いってしまったのではないかと反省した。同じルーブリック評価でも、学生ができた点を指摘する<sup>2)</sup>ことで学生のやる気を喚起する形が望ましいだろう。

本来であれば、学生にマイ・ルーブリックを作成してもらい<sup>3)</sup>、マイルストーンやキャップストーンを自分で決めた形で、自分のルーブリック表に、自己評価をしてもらうこと



が望ましい。今後は、次のステップとして、これを検討したい。

## 4 1年次後期基礎演習の結果

今回の学習をととして、学生はSDGsをどのように理解したであろうか。まずは学生たちが取り上げたテーマおよびSDGsの3つの目標をリストアップしたい。

1年生の選んだテーマの特徴として、差別や不平等の問題を取り上げる学生が多かった。これはこのクラスに特徴的であるか、この学年に特徴的であるかは、明確ではないが、授業中に何回かZoomでブレイクアウトセッションを持ち、そこでお互いに話し合っていたことが、このようなテーマの選択につながった可能性は高い。コミュニケーション能力の向上という点では、コロナ禍にあって人との接触が限られた状況ではあっても、お互いに話し合った形跡が見られることは、Zoomとはいえ、話し合いを持つことの大切さがうかがわれる。他方で、環境関係のテーマを選んだ学生が少なかったことも、特徴といえよう。さらに大学に入って教育について、やはり考えたのだろうか、目標4の質の高い教育に注目した学生も多かった。全体の統計結果は、後述の2年生の結果と合わせて考察する。

表3 1年生のレポート課題と3つの目標

差別をなくすこと	1,6,10
世界の貧困の差をなくすために個人が貢献できること	1,2,10
アジアと貧困、経済格差の問題について	1,4,10
アフリカとSDGs	4,10,12
なぜ世界は平等になれないのか	2,4,10
格差をなくす	3,4,10
人種差別をなくすために私たちにできること	5,10,16
差別のない平等な医療を世界に	3,9,10
コロナで浮き彫りになった障がい者の雇用問題	8,10,17
児童労働とSDGs	1,4,16
自殺とSDGs	3,10,16
世界の大きな命を守るために	3,6,12
環境汚染問題とSDGs	12,14,17
中国の動植物とSDGs	13,14,15

## 5 2年次演習の概要

### 5.1 ねらい

ゼミでは3つのことを課題とする。

ひとつは、地球社会の在り方を考えるということで、グローバルな公共政策について考える。学生時代でなければ考えられないような、幅広い世界観を培うことを目的とする。そのことによってグローバルな視点を培い、地域社会の発展に貢献できる力を身につける。(DP3・DP5)

つぎに、ゼミ生の関心に応じて国際関係関連の教科書を読んで議論する。それによって、多文化を理解し、国際的な教養を幅広く身につけるとともに、実践的なコミュニケーション能力を身につける。(DP1)

最後に、自分の考えをまとめてレポートが書けるようになることを目的とする。レポートを書くことによって論理的な思考能力と文章力を培う。それによって卒業後の進路目標

に応じた専門知識を体系的に身につける。

特に2年次後半は、レポートの書き方について習熟してもらう。2年次には、国際社会における多様な問題を教科書を通して学んでもらい、その中から自分が興味のあるテーマを探し出してもらうことを1年間の課題とする。

## 5.2 授業の進め方

教科書を交代で輪読していく。予習として全員が教科書を事前に読んでくること。毎回のレポーターを決め、レポーターは教科書の担当部分を精読して、レジュメを作成し、発表をする。発表をもとに、ゼミ生全員が、内容について議論をする。学生相互にフィードバックしあう。

ゼミは学生が主体の授業である。講義中に学生が積極的に発言することが大切である。レポーターのみならず毎回、ゼミ生全員の授業の参加度を重視する。

ゼミは、大学の授業の中で、最も学生がアクティブであることが求められる。繰り返しになるが、ゼミ形式の授業ということは、教科書を交代で輪読していく。予習として全員が教科書を事前に読んでくること。毎回のレポーターを決め、レポーターは1教科書の担当部分を精読して、レジュメを作成し、発表をする。発表をもとに、ゼミ生全員が、内容について議論をする。学生相互にフィードバックしあう。

ゼミは学生が主体の授業である。講義中に学生が積極的に発言することが大切である。レポーターのみならず毎回、ゼミ生全員の授業の参加度を重視する。

## 5.3 評価

表4 2年生の評価基準

秀 (S)	達成したいキャリアの目標に応じた専門知識を体系的に身につけるという授業のねらいを超えて、自ら探求し理解を深めるレベルに達している
優 (A)	達成したいキャリアの目標に応じた専門知識を体系的に身につけている
良 (B)	本科目の内容を概ね把握しているが、達成したいキャリアの目標に応じた専門知識を体系的に身につけるまでにはいたっていない
可 (C)	本科目の内容を概ね把握している
不可 (D)	本科目の内容を把握できていない

## 5.4 学習内容

表5 2年次前期のシラバス学習内容

1	スタートアップ	授業の進め方について知る 各自の学習目標と計画を立てる
2	教科書の読み方	レポーターのやり方、配分、『レポート・論文の書き方』
3	ゼミでの学び方	ゼミの進行方法および論文の読み方
4	国際学とは何か	国際学を学ぶ強みを知ろう！
5	プレゼンのやり方	プレゼンのやり方、パワポの作成方法を学ぶ
6	第1章 グローバル公共性	これまで学んできたグローバルな公共性、誰も何も排除しない公共性が地球社会をどのようにけん引していくか考える
7	第2章 グローバル公共政策と公共財	国際公共政策とグローバル公共政策の違いを考える どこ国も人も排除しない地球全体の公共政策はありうるか考える
8	第3章 国際連合	国連とグローバルな公共性との関係を考察する
9	第4章 世界銀行	IMF、WTOとAIIB 世界経済は誰が動かしているのか 経済的な国際機構を通して考える
10	第5章 EU(欧州連合)	30弱の欧州の国を包摂するEUの政策決定はどのようになされるのか。
11	第7章 アメリカ	国際交渉と国内政治 世界に影響を与えるアメリカの政策決定はどのようになされるのか

12	第10章 人間の安全保障	人間の安全保障を脅かす国際社会の事例を考えてみる
13	レポートの参考文献 1	参考文献の見つけ方
14	レポートの参考文献 2	適切な参考文献を選んでいるか、確認する
15	レポート概要報告	各自にレポートで書く予定の内容の概要を報告してもらう

表 6 2年後期のシラバス学習内容

1	合同ゼミ (Zoom)	東北公益文科大学の学生たちとの交流
2	デジタル・トランスフォーメーション (DX) を学ぶ	国際機構とデジタル・トランスフォーメーションの学びに関する話し合い
3	ゼミでの学び方	ゼミの進行方法、教科書の読み方、プレゼンのスキルなどを確認する。特に後期ではグループ・ディスカッションなどのコミュニケーション・スキルも加えて考える
4	第12章 テロリズム	テロリズムをどう考え、どう対処したらよいか考えよう
5	第13章 民主化と人権	世界全体で民主化は進んでいるのか？ 人権は守られているのか検討する
6	第15章 地球環境ガバナンス	地球温暖化、砂漠化、プラスチックの海洋汚染など、人類全体の生活に影響を及ぼす環境問題を考えよう
7	第16章 資源	資源は紛争の原因ともなる。地球上の資源を考えることの大切さを知ろう
8	第18章 グローバル・コモンズ ——グローバルな公共領域	南極、公海、宇宙、IT空間など、特定の国に制限されない空間について、人類はどう考えていったらよいか考えよう
9	レポートの書き方 その1	テーマの見つけ方、章立ての方法を学ぶ
10	レポートの書き方 その2	レポートの書き方のマナー、効果的な方法などを学ぶ
11	レポートの書き方 その3	注の書き方について確認する
12	レポートのテーマ確定	各自の選んだレポートのテーマ、章立ての予定などを発表してもらう
13	レポートの参考文献 1	参考文献の見つけ方
14	レポートの参考文献 2	適切な参考文献を選んでいるか、確認する。。
15	レポート概要報告	各自にレポートで書く予定の内容の概要を報告してもらう

## 6 2年次専門研究の詳細

### 6.1 SDGsの学び

2年次専門研究では、教科書『新グローバル公共政策』<sup>4)</sup>を輪読して、アカデミック・リーディング、レジュメの作成、プレゼンテーション・スキル、グループ・ディスカッションなどのコミュニケーション・スキルを学んでもらった。同書は、国際社会に発生している様々な問題を取り上げ論じている。SDGsが取り扱っているテーマとも重なるところが多いため、グローバルな社会問題を概観するのにふさわしい内容となっている。学生たちは、同書を手に取って、各自が興味を持ったテーマを選択した。内容としては教科書の輪読であるが、前述の学習内容は、シラバスの順番とは少し異なっており、実際に学生たちが各自のテーマを選び、レポーターとしてプレゼンを行った順番と内容になっている。教科書は全部で18章立てであるが、この中から11名の学生が興味を持ったテーマを選んで発表した形となった。

SDGsの学びについては、前述のごとく前期は失敗した。前期の期末レポートは、前述の1年後期の学生と同じ内容をテーマとした。すなわち、

「国際社会にとってSDGsは必要か？ という問いに対して、自己が興味を持つ国際社会の問題をひとつ取り上げ、これについて論じなさい。」

前述のごとく、1年後期の学生に対して、このテーマを、「国際社会にとってSDGs」は何かというマクロな問いと、「自己が興味を持つ国際社会の問題をひとつ取り上げ」という



後段のミクロな問いに分割して投げかけた場合、レポートの主旨を学生が理解し、意図に沿った内容のレポートを提出してきたが、2年生でも、マクロな問いとミクロな問いを一度に投げかけられると、初めて耳にした言葉「国際社会にとってSDGs」は何か、との問いに対する答えのみをそれぞれが概説する結果となった。2年後期に入って、前述の1年後期の学生たちと同じように、分割して問いを投げかけると、問いの意味を的確に理解できたようである。学生の理解度の問題以上に、教員の学生への問いの投げかけ方を工夫する必要があったことがわかった。

2年生は、教科書を利用したこと、レポートも2400字と、1年生よりも多い分量のレポートを課したこと、後期のレポートは、ほぼ全員が納得のいく内容を書いている。特筆すべきことは、SDGsの3つの目標を選ばせたことであった。ひとつか2つだけ選ばせた場合、ほとんど新聞に書いてある内容など、インターネットの記事をそのまま引用して書いたようなレポートになる場合がある。しかし3つの目標を選ぶ場合、レポートのメイン・テーマと3つの目標との関係を考えるプロセスを経なければならない。そのことによって、学生のオリジナルな思考を喚起することとなる。インターネットの剽窃のような文章にはできなくなる。内容的に決して難しいことを考えて書くわけではないが、自分の言葉で書いた文章が出てくる。もちろん、すべての学生が、これを完璧にこなしていたわけではなく、中には3つの目標の羅列のようなレポートも見受けられた。しかし、前述の学習内容にも記したが、授業の最後にレポート内容を発表してもらったため、3つの目標の羅列のような内容はプレゼンの段階で可能な限り軌道修正を図ることができた。

## 6.2 ルーブリック評価

ルーブリック評価については、2年生の前期に、マイ・ルーブリックを作成してもらった。しかし、ほとんどの学生が、アカデミック・スキルおよびコミュニケーション・スキルの意味がわからず、マイルストーンやキャップストーンなどの言葉は、ますます混乱を深める結果となった。多くの学生がマイ・ルーブリックに記した内容は、「友達を作る」「友達と仲良く話す」などの、授業外での友人作りをコミュニケーション・スキルの部分に記していた。コロナ禍でもあり、友人との交流も難しい状況で、最も彼らが望んでいたことであることは理解できる。他方で、アカデミック・スキルとはどのような内容のものか、コミュニケーション・スキルとはどのような内容のものか、また、マイルストーンやキャップストーンはどのように書いたらよいか、すべてを学生自身で記すことは難しく、むしろ詳細なメニューを示して、その中から自己の達成したい内容を選ばせるという手法が望ましいということがわかった。しかし、「ルーブリックとは何か」という基本的なところから、後期は学んでもらい、マイ・ルーブリックの作成は、来年度の課題とした。

2年の後期は、前述の1年後期と同じように、クラスメートのプレゼンをルーブリックを利用して相互評価してもらうところから始めて、ルーブリックを体験的に理解してもらうように努めた。2年生の場合、1年生と比較してルーブリックを表面的にではなく、深く理解した形跡がある。レポートのルーブリックを利用して、自分の期末レポートを自己評価してもらったが、全員が自己評価の重要性を認識し、自己評価ルーブリックを期末に提出してきた。今年度はルーブリックの概念を理解してもらうことが目標であったが、来年度のマイ・ルーブリックに向けて、一歩自己評価の大切さ、自分で自分が進歩していることを実感することの大切さに気づいてくれたと考えられる。

## 7 SDGs学習の結果——1・2年次双方のまとめ

まずは2年生が取り上げたテーマを記したい。学生のレポートのテーマの選択に、クラスメートとのZoomによるブレイクアウトセッションにおける会話が大きく影響することが推察される。クラスによって、同じようなテーマを選ぶ傾向にある。1年生は「差別」をテーマとした学生が多かったが、2年生は「コロナ」と「環境」に関わるテーマが多かった。

表7 2年生のレポート課題とSDGsの3つの目標

オーストラリア森林火災	13,14,15
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)と自然環境	13,14,15
地球温暖化による気候変動への対策	13,14,15
安全な水、海の豊かさと社会	6,11,14
コロナとSDGsの関連性について	3,16,17
コロナウイルスによる世界への影響	10,16,17
コロナの影響で日本の民間給与が減少	1,2,4
新型コロナウイルスの光と影	1,3,10
ジェンダー平等とSDGs	5,8,10
ジェンダーとSDGs	4,5,16
代理出産問題から見るSDGsの必要性	7,11,16

SDGsの17の目標のうちの3つの目標について、どのような傾向があるか、1年、2年双方を比較しながら見てみよう。

表8 SDGs 17の目標と学生の選んだ3つの目標

	SDGsの17目標リスト	1年	2年	合計
1	貧困をなくす	4	2	6
2	飢餓をゼロに	1	1	2
3	すべての人に健康と福祉を	4	2	6
4	質の高い教育をみんなに	5	2	7
5	ジェンダー平等を実現しよう	1	2	3
6	安全な水とトイレを世界中に	1	1	2
7	エネルギーをみんなに そしてクリーンに	0	1	1
8	働きがいも経済成長も	1	1	2
9	産業と技術革新の基盤をつくろう	1	0	1
10	人や国の不平等をなくそう	9	3	12
11	住み続けられるまちづくりを	0	2	2
12	つくる責任つかう責任	3	0	3
13	気候変動に具体的な対策を	1	3	4
14	海の豊かさを守ろう	2	4	6
15	陸の豊かさを守ろう	1	3	4
16	平和と公正をすべての人に	3	4	7
17	パートナーシップで目標を達成しよう	2	2	4

上述からわかるように、SDGsの17の目標のうち学生たちは目標10の「人や国の不平等をなくそう」に大きな関心を寄せている。格差社会のひずみを敏感に感じ取っている様子が見られる。また、大学生だけあって、目標4の「質の高い教育をみんなに」に関心があ

る学生が多い。さらに抽象的なテーマのように思えるが目標16の「平和と公正をすべての人に」に関心を寄せる学生も多い。3番目に多かったのが、コロナ禍にあって目標3の「すべての人に健康と福祉を」、目標1の「貧困をなくす」および、目標14の「海の豊かさを守ろう」であった。他方で関心が低かったのは、目標7の「エネルギーをみんなに そしてクリーンに」と目標9の「産業と技術革新の基盤をつくろう」であった。産業や技術で社会を発展させることよりも、むしろ足元の不平等や教育、平和などの、自分たちが直面している問題をどう克服するかが彼らの関心事項であることがわかった。

## 6 おわりに

SDGsに関する総合地域研究所でのプロジェクトとしては、今年が3年目で最後となったが、SDGs教育研究としては、いまだ端緒についたばかりといえる。SDGsの学びとルーブリック評価の学びという2つの大きな課題を併せ持つ演習であったが、さまざまな気づきをもたらしてくれた。

SDGsという一見マクロなテーマと思える目標であるが、自分事として考えるミクロな視点が必要となる。このマクロとミクロを、どのように組み合わせて考えるか、学生たちに学んでもらう大きな課題である。前期に、いきなりマクロな課題とミクロな課題を同時に示すと、SDGsという言葉自体も初めて知る学生たちにとって、その言葉の意味を理解するレポートを執筆することに精いっぱいであった。しかし、後期に入って同じ問いを立てながら分割して問いかけることによって、問いへの理解が深まり、マクロな課題とミクロな課題との対話を考えるようになった。また3つの目標を立てることによって、より自分の力で考えてオリジナルな言葉を引き出す契機となった。

ルーブリックについては、その仕組みを理解することが今年度の課題であった。まずはプレゼン・ルーブリックを用いて、学生同士が相互評価をすることによって、頭で理解するよりも実践で理解することができ、ルーブリック概念への理解が深まった。さらにレポートのルーブリックでは、自己評価を課題としたが、2年生はこれをかなり真剣に考えるようになった。教員がこれにフィードバックをしたが、読み返した学生は、その意味を理解できたのではないだろうか。次年度にそのあたりを確認してみたい。

学習成果の可視化といわれるが、何よりも学習者本人の気づき、本人が自己の学びを可視化することが大切であることが認識された。今後はマイ・ルーブリックの作成によって、さらに学習者が、自分でパーソナライズしたオリジナルの目標を立て、これに向けてどこまで自分が進展したかを確認する方向に進むことを望みたい。

(注)

- 1) ダネル・ステューブンス+アントニア・レビ、佐藤浩章監訳、井上敏憲+俣野秀典訳『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部、2014年。
- 2) この点は共同研究の研究会における市川洋子教授の指摘を得た。
- 3) マイ・ルーブリック、マイルストーン、キャップストーンについては、本誌、市川洋子「2年次専門研究ⅠにおけるSDGsの取り組み」pp.3-4を参照のこと。
- 4) 庄司真理子、宮脇昇、玉井雅隆他編『新グローバル公共政策』晃洋書房、2016年。